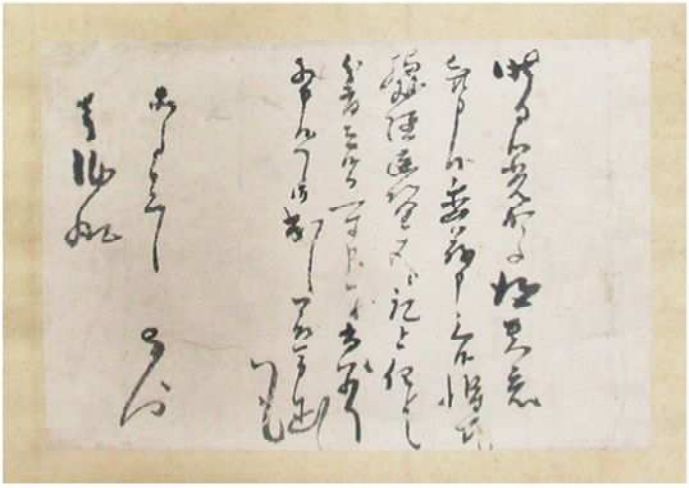
# 中江藤樹の志とともに

## 藤樹の門人　大野了佐

大野了佐（1612～1688）は、中江藤樹（1608～1648）が大洲（現在の愛媛県大洲市）で奉行をしていた頃の同僚の子どもでした。了佐の父は、了佐を武士以外の職につかせようと考えており、了佐自身も、人の役に立てる医者になりたいと強く願っていました。そこで了佐は、藤樹に医学書の読み方を教えてほしいと相談し、藤樹を師として学ぶようになりました。

藤樹の遺墨のなかに「捷径医筌（しょうけいいせん）」に関する書簡」があります。捷径とは近道、医筌とは医学のことで、捷径医筌とは「医学の近道」という意味です。藤樹は、了佐のために、国内だけでなく中国の医学書も買い求め、その全部を読みこなして、医学の手引書を作成しました。この書簡は、手引書の続きができたので、了佐に取りに来るように伝えたものです。了佐が学び終えたとき、書き進めながら教えた「捷径医筌」は、四百字づめ原稿用紙にして千枚にものぼる量になっていました。

了佐は熱心に何度も繰り返し勉強して医者になり、のちに宇和島（現在の愛媛県宇和島市）に移り住み、村人に慕われながら医者の仕事を全うしました。一度立てた志を貫く粘り強さを持っていた了佐と、了佐の志を実現させた藤樹の偉大さを知ることができます。



捷径医筌に関する書簡

藤樹かるた

## 令和5年度企画展

近江聖人中江藤樹記念館では、「志つよく引き立てはげむべし、石に立つ矢のためし聞くにも」（志を強く持って真剣に努力すれば、不可能なことも可能になる）という藤樹の代表的な和歌にも表される「志」をテーマに、「藤樹の志とともに～中江藤樹遺墨展～」を令和6年2月29日（木）まで開催しています。

「捷径医筌に関する書簡」をはじめ、当館では初公開となる貴重な真筆も展示しています。藤樹の学問に対する真摯な姿勢をうかがうことのできる機会ですので、ぜひお越しください。

藤樹先生遺墨帖

問 近江聖人中江藤樹記念館
☎(32)0330

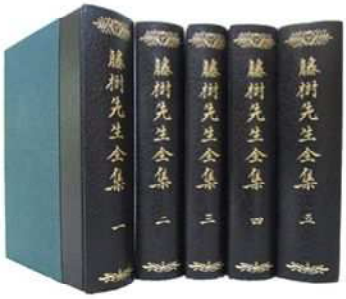
# 加藤盛一と高島

## 旧制県立今津中学校初代校長

日本陽明学の祖や近江聖人と称され親しまれる中江藤樹（1608～1648）が近江国小川村（現在の安曇川町上小川）に生まれて今年で415年になります。その間、多くの人々が藤樹の研究に携わり、現在でも資料などを通して、藤樹の教えや人物像に触れることができます。中でも大正から昭和初期にかけて藤樹研究を行った加藤盛一（もりかず）（1884～1945）は、学術的にも、また現在の高島市にとっても重要な人物です。広島県出身の加藤は、広島高等師範学校、京都帝国大学文科大学哲学科を卒業して国語・漢文の教師となり、大正9年（1920）に旧制県立今津中学校（現在の県立高島高等学校）初代校長に就任しました。藤樹の研究を行い、その学徳を学校教育の中に取り入れることが就任の条件であったため、本格的な研究に着手したと考えられます。

## 藤樹先生全集

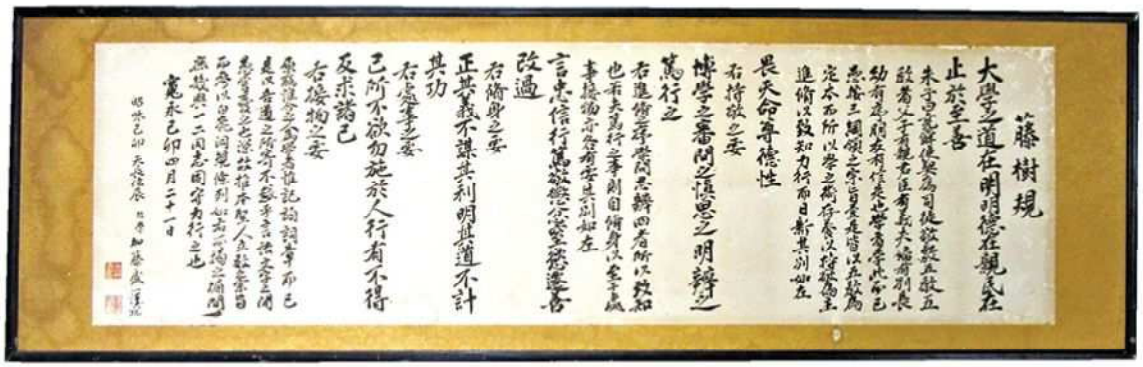
この頃、県立中学校の設立とともに推し進められた藤樹神社の創立事業の中で、中江藤樹の全集編さん事業が計画され、加藤が編さん主任に就任しました。校長就任から3年後、加藤は旧制高知高等学校に転任し、その後京都帝国大学大学院で学びながら、編さんメンバーとともに滋賀県下や大洲、岡山などへ何度も赴き調査を行いました。厳密な検証のもと約10年の歳月を費やし、昭和3年（1928）ついに『藤樹先生全集』（全5巻）が刊行されました。同15年（1940）には増訂再刊本が刊行され、再び編さん主任を務めたほか、『藤樹先生遺墨帖』（藤樹頌徳（しょうとく）会発行）の編さんや、論文も多く発表しました。




藤樹先生全集
（近江聖人中江藤樹記念館蔵）

## 敦厚剛毅（とんこうごうき）

晩年、加藤は故郷の広島文理大学の教授に就任しましたが、昭和20年（1945）広島に投下された原子爆弾に被災し、生涯を終えました。加藤が精魂を尽くして手掛けた全集や遺墨帖は、藤樹研究のバイブルとして、現在も多くの研究者の元で役立てられています。加藤の遺したものは文献資料だけではありません。『敦厚剛毅』は現在も高島高校の校訓として創立時から続く言葉で、『敦厚』はまごころが厚いこと、『剛毅』は意志が強く何事にも屈しないという意味です。加藤は中江藤樹の人となりを表す言葉としてこれを掲げ、未来を担う若者たちに、思いやりと強い心を持つ人になってほしいという願いをこめました。加藤は高島の未来に、中江藤樹の志を繋いだ代表的な人物であると言えるでしょう。




加藤盛一書　藤樹規（個人蔵）

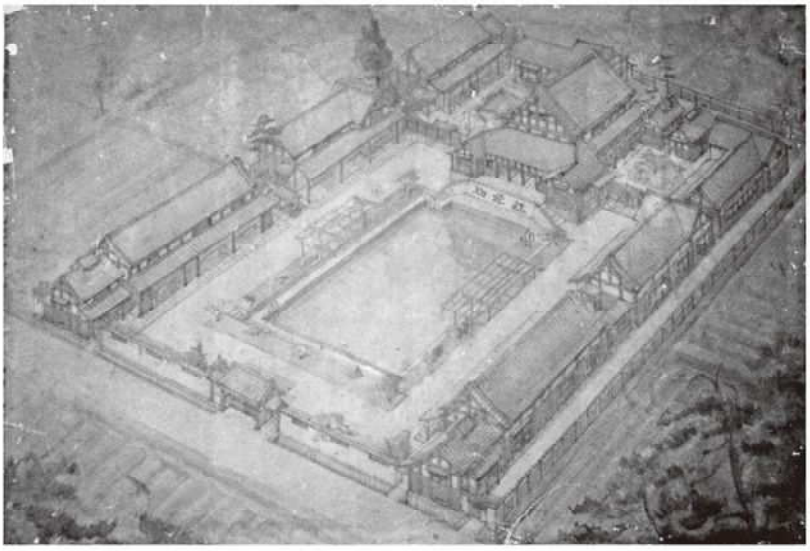
問 近江聖人中江藤樹記念館
☎（32）0330

# 藤樹研究の一大拠点「小川寮」

## 藤樹頌徳会（とうじゅしょうとくかい）（小川寮建設発起団体）

藤樹頌徳会は、昭和7年（1932）に、大正から昭和にかけての倫理学者で鳥取県出身の広島文理科大学教授である文学博士、西晋一郎（1873～1943）が中心となり設立した中江藤樹の教育思想の普及に大きく寄与した研究団体です。その設立の目的は、全国各地で藤樹の研究に取り組む会員相互の連携を深め、会員が藤樹の学問や道徳、教育内容についての理解を深めることでした。

日々の研究については、会の発展に伴い全国に設立されていったそれぞれの支部で行われていました。



小川寮絵図（個人蔵）

## 「小川寮」の建設

安曇川町上小川にある藤樹書院は、慶安元年（1648）に完成した、門人を中心に藤樹の教えに関心のある者たちが学ぶ拠点です。領主である大溝藩主・分部公に「講会」が禁止されていた期間はあったものの、藤樹の没後も長い期間、遺徳をしのぶ学者たちで活況を呈していました。

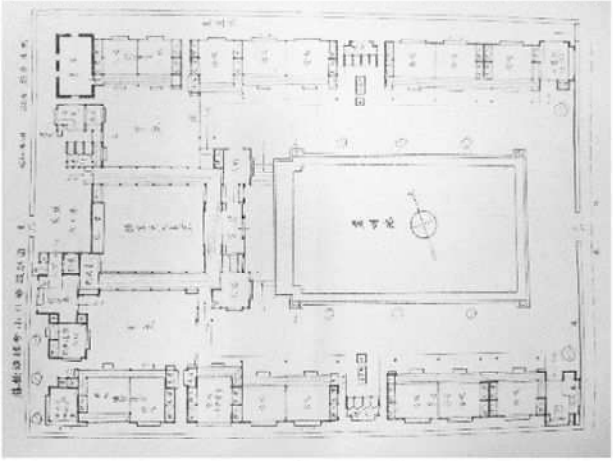
しかし、藤樹の教えを学ぼうと小川村を訪れた人々が、長期間小川村に滞在しながら学ぶことのできる宿泊機能を備えた大規模な宿泊機関「寮」は存在しませんでした。

そこで、藤樹書院や玉林寺の墓所、藤樹神社等々が点在する小川村に、藤樹教育を推進しようとする教育者のための研究所、宿泊機能を備え、藤樹研究の拠点である教育村を展開しようと藤樹頌徳会が建設を始めたのが「小川寮」です。

ただ、太平洋戦争が激化したため昭和14年（1939）に全体計画の一部である「明徳寮」が完成した後は、計画が進むことはありませんでした。

この「小川寮」が当初の予定どおり完成していたら、想定の何倍もの費用がかかるほどの立派な建物でした。その建設経費には、藤樹を愛する人々の浄財があてられる予定でした。

計画では外観は清楚であり、全体に明るい色調で、当時の小川村周辺の風景に調和していました。



小川寮設計図（出典：藤樹頌徳会発行「藤樹頌徳会について」1934年）

藤樹を愛する多くの人々が、その完成を熱望していたことでしょう。

問 近江聖人中江藤樹記念館
☎（32）0330

# よみがえった遺愛の藤

## 藤樹という呼び名

中江藤樹は、慶長13年(1608)3月7日、近江国小川村の大きな藤の木のある家で生まれました。本名は「原」と言いましたが、通称「与右衛門」と呼ばれていました。32歳頃から41歳で亡くなるまで、ここに私塾を開設し、村の先生として尊敬されていました。生家にひときわ大きな藤の木が生えていたことから、村人や門人からは「藤の樹」の屋敷に住まわれている先生、すなわち「藤樹先生」と呼ばれるようになりました。

大正期撮影　満開の藤

## 藤樹書院の藤の木

藤樹先生という尊称の由来となった藤の木は、近隣からも眺められるほどの大きな木で、藤樹書院のシンボルとして知られていました。左上の写真は、大正期に撮影されたもので、写真の台紙には、「先生遺愛ノ藤満開ノ時」と墨書され、「三羊館謹写」と印刷されています。

この藤のツルは、高さ15メートル前後あるヨノミの木(エノキの別称)に巻きついて、毎年5月の初旬ごろには美しい紫色の花を咲かせていました。しかし、時がたち老樹となったヨノミの木と藤は道路にたれかかり、その下を往来するバスや人々の妨げとなりました。倒木の危険が生じるような状況になり、平成11年(1999)12月、根元から伐採されました。

令和5年撮影　開花した藤

## よみがえった藤の花

みんなに親しまれ、愛された藤の木は、藤樹書院から明治40年(1907)に愛媛県大洲市にある大洲高校に、昭和11年(1936)には鳥取県米子市にある就将小学校に移植されました。現在も「遺愛の藤」として、大切に育てられています。

藤樹書院の北西部には藤棚があります。平成28年(2016)9月に補修された藤棚には、大正期に植えられた藤の木がツルや枝を広げ、毎年、長い房の花を咲かせています。昨年その藤棚の片隅に、小さな房の藤の花が咲きました。やむなく伐採された切株に程近いところから伸び、芽吹いたものです。

23年あまりの年月を経て、再び花を咲かせた「遺愛の藤」は、これからも美しい花を咲かせ、皆さんの心を癒し、楽しませてくれることでしょう。

問 文化財課 ☎(25)8559

**【お詫びと訂正】**
4月号に次の誤りがありました。お詫びのうえ訂正いたします。
「絅斎書院100周年」3段目の西暦
(誤)(1911)　**(正)(1910)**

**編集雑感**

この度の異動で7年ぶりに広報担当に戻ってまいりました。気持ちを新たにがんばりますのでよろしくお願いします！ 特に今年度は市制20周年や湖西線開業50周年、次年度は国スポ・障スポと大きいイベントが続きますので、市民の皆さんにわかりやすく情報をお届けし盛り上げていければと考えています。(S)

広報たかしま
令和6年5月号 No.292
発行▼高島市　編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740(25)8000(代)
https://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp

R70 古紙パルプ配合率70%再生紙を使用。

# 富岡鉄斎と高島のつながり

## 富岡 鉄斎　没後100年　高島での交流

近代日本を代表する文人画家である富岡鉄斎は、天保7年（1836）京都三条室町衣棚町の商家の次男として生まれました。鉄斎は幼い頃、病で耳が不自由になり、商いの道に進むことはできなくなりましたが、学問が好きだったので、商人道徳を説いた石門心学を中心に勉学に励みました。また独学で多様な絵画技法を身につけ、多くの絵画作品を生み出しましたが、画家と呼ばれることを嫌い、儒学や国学、仏教なども広く学び、儒学者としての立場を貫きました。大正13年（1924）12月に、数え年89歳で亡くなるまで、鉄斎は生涯の大半を京都で過ごしましたが、幾度となく高島の地を訪れたことが分かっています。

大田神社の標石

鉄斎は30歳前後から、交流のある知人が住む新旭町太田を複数回訪れています。

明治28年（1895）に大田神社（新旭町太田）の氏子から依頼され、鉄斎が書いた社名を刻んだ標石や、明治32年（1899）に建てられた大荒比古神社（新旭町安井川）の紀念碑など、現在も市内各所に鉄斎ゆかりの史跡を見ることができます。

## 陽明学との出会い

鉄斎は学んだ学問の中でも、幕末から明治初期にかけて活躍した儒学者である春日潛庵（1811～1878）に教わった陽明学に大きな影響を受けました。その実践の教えを日本の陽明学として広めた中江藤樹を尊敬していました。このため、明治17年（1884）8月と明治30年（1897）9月25日の藤樹先生250年祭には藤樹書院に書を納めています。また、大正13年（1924）5月、藤樹神社社掌の小川喜代蔵からの依頼によって、「清渓洗心図」を藤樹神社に納めており、この作品の賛（絵画作品の上部に書き込まれる詩文）には、王陽明の言葉が引用されています。

鉄斎の多くの作品には、絵とともに賛が書かれています。鉄斎は日頃から、「私の描いたものを見るなら、まず賛を見よ。」と語り、作品に込められたメッセージを残そうとしたようです。

問 文化財課
☎（25）8559

清渓洗心図　藤樹神社蔵

**編集雑感**

10月は秋ということで、おいしい食べ物、文化・芸術などいろいろなことが盛りだくさんな時期ですが、皆さんは何の秋を満喫していますか？私は、スポーツの秋ということで、9月に引き続いて、11月に行われる国スポリハーサル大会を観戦しようと思います。身近なところでそれぞれの競技のトップクラスの選手たちの活躍を見ることができる貴重な機会なので、皆さんもぜひお越しください！（K）

広報たかしま
令和6年 10月号 No.297
発行▼高島市　編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740(25)8000(代)
https://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp

R70 古紙パルプ配合率70%再生紙を使用。